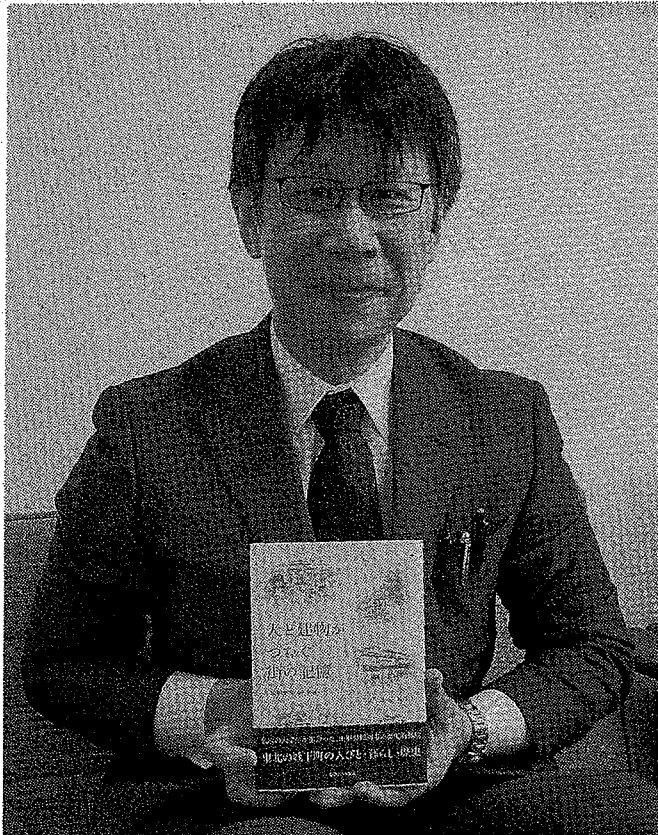


人と建物がつむぐ街の記憶

— 山形県鶴岡市を訪ねて(1) —

弘前大・高瀬准教授と学生が調査まとめ出版



大寶館や旧武家屋敷数寄家、森茂八商店など、鶴岡公園とその周辺に現存する歴史的建造物と人々の物語「人と建物がつむぐ街の記憶」山形県鶴岡市を訪ねて(1)―(弘前大学出版会)がこのほど刊行された。弘前大教育学部准教授の高瀬雅弘さん(44)と学生たちが行った社会実習調査の報告書をまとめ書籍化したもので、編著の高瀬さんは「鶴岡の歴史的風致と共に生きてきた人たちの記憶を受け継ぎ、次代へ伝えていく素材の一つになれば」と話している。

次代へ伝えていく素材の一つに

2014年に弘前市で行った「画」重点地区の鶴岡公園と敷管家、羽前絹練株式会社、短期滞在型旅の家「皓鶴亭」、鶴岡カトリック教会天主堂、森茂八商店、鯉川支店、旧鶴岡ホテル、カメラショップさいひろ、割烹三浦屋錦雲閣の10カ所を調査。建物の歴史的背景や当時の周辺の様子、建物に残る貴重な「遺産」を写真に収め、そこで出会った人たちが語る「記憶」を学生の視点で聞き取りした。

同書は建物ごと10章で構成。鶴岡市郷土資料館などの協力で、往時の写真を数多く織り交ぜ、建物と街並みを視覚的にもよみがえらせている。このうち、3階建て和風建築の三浦屋錦雲閣(旧七日町)の章は、「心と文化をつなぎ、重ねる」の表題。所有者の瀬尾恵太郎さんが見つめてきた、瀬尾さんの父・富蔵さんが1938年に建造してからこれまでの歴史ストーリーや、料理屋や置屋、待合で形成された花街だった周辺の様子、錦雲閣にたびたび訪れた文化人・野口雨情と「鶴岡小唄」の逸話などをまとめた。また、3階まで吹き抜けの構造や「喜楽」一田舎などの座敷、洋風の「観月荘」など、豪壮で華麗な建造物の物語も写真とともに紹介している。

長唄の指導なども行いながら建物を守り続けている瀬尾さんについて「錦雲閣は江戸の文化とのつながりを保つ場所となっており、ここで瀬尾さんは、幼いころから身体に染みこんだ文化をつむぎ続けている」とつついている。

「人と建物がつむぐ街の記憶」山形県鶴岡市を訪ねて(1)―」を手に、編著の高瀬さん

A5判、フルカラー204頁、3200円(税別)。鶴岡市内の各書店やアマゾンで取り扱っている。

※この記事は荘内日報社の提供です。

[問合せ先]弘前大学出版会

hupress@hirosaki-u.ac.jp

この画像は、当該ページに限って荘内日報の記事利用を許諾したものです。

転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。